

# アジア各国と日本の 英語教科書比較



教育再生懇談会会議資料  
2008年5月16日(金)都市センターホテル

投野由紀夫  
東京外国語大学  
基盤研究A(小池科研)メンバー

## 本研究のベース



- 平成16-19年度科学研究費補助金研究 基盤研究(A)  
小池生夫 代表 (課題番号 16202010)  
「第2言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」
- この研究の一部である「教科書班」の英語教科書分析の一部を紹介する。
- 中国・韓国・台湾の英語教科書 vs. 日本の英語教科書のコーパスに基づくテキスト・語彙分析

# 報告のポイント

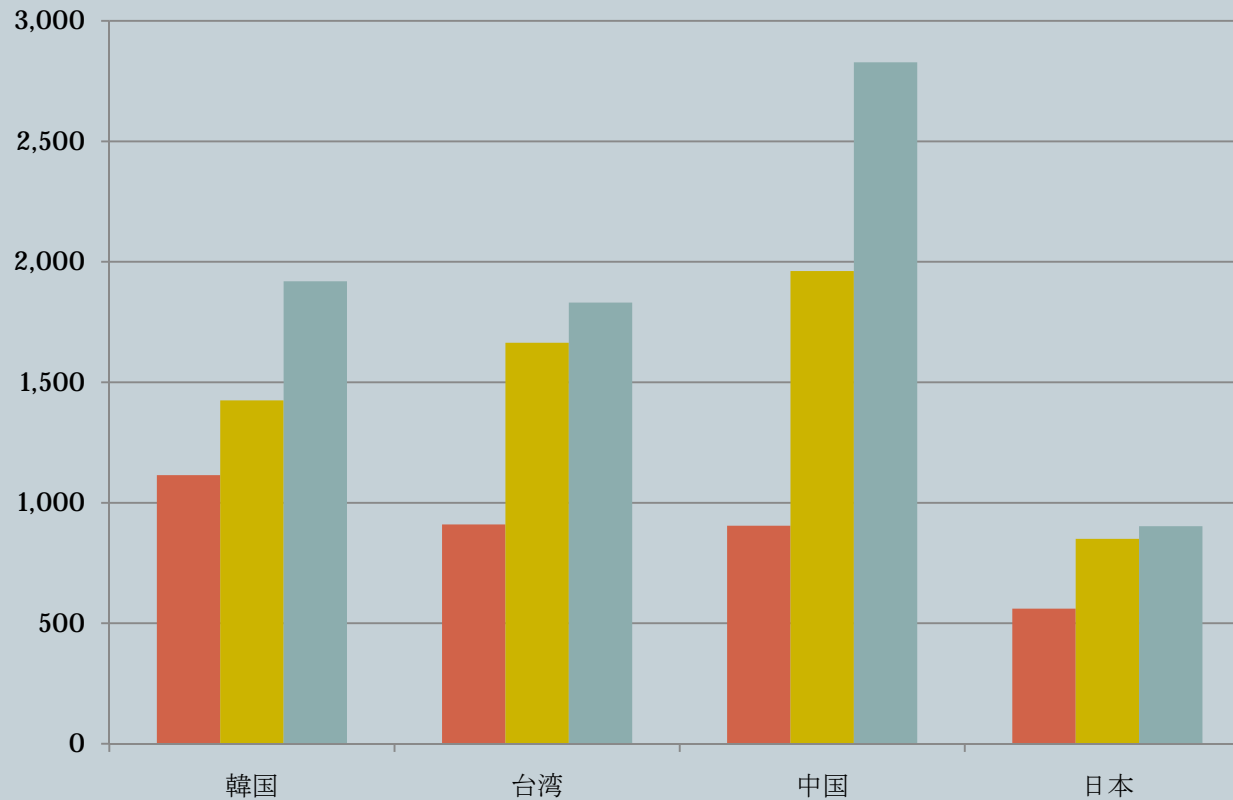


- ポイント1: 中学で接する英語の分量
- ポイント2: 中学～高校への積み上げ部分の設計
- ポイント3: 接している英語の質的な問題
- ポイント4: 小学校英語を含めて考えると...

# ポイント1: 中学で接する英語の分量



## ● 中学3年分の英語教科書に出現する異語数の比較



学年ごとに異語数を計算  
(重複あり)

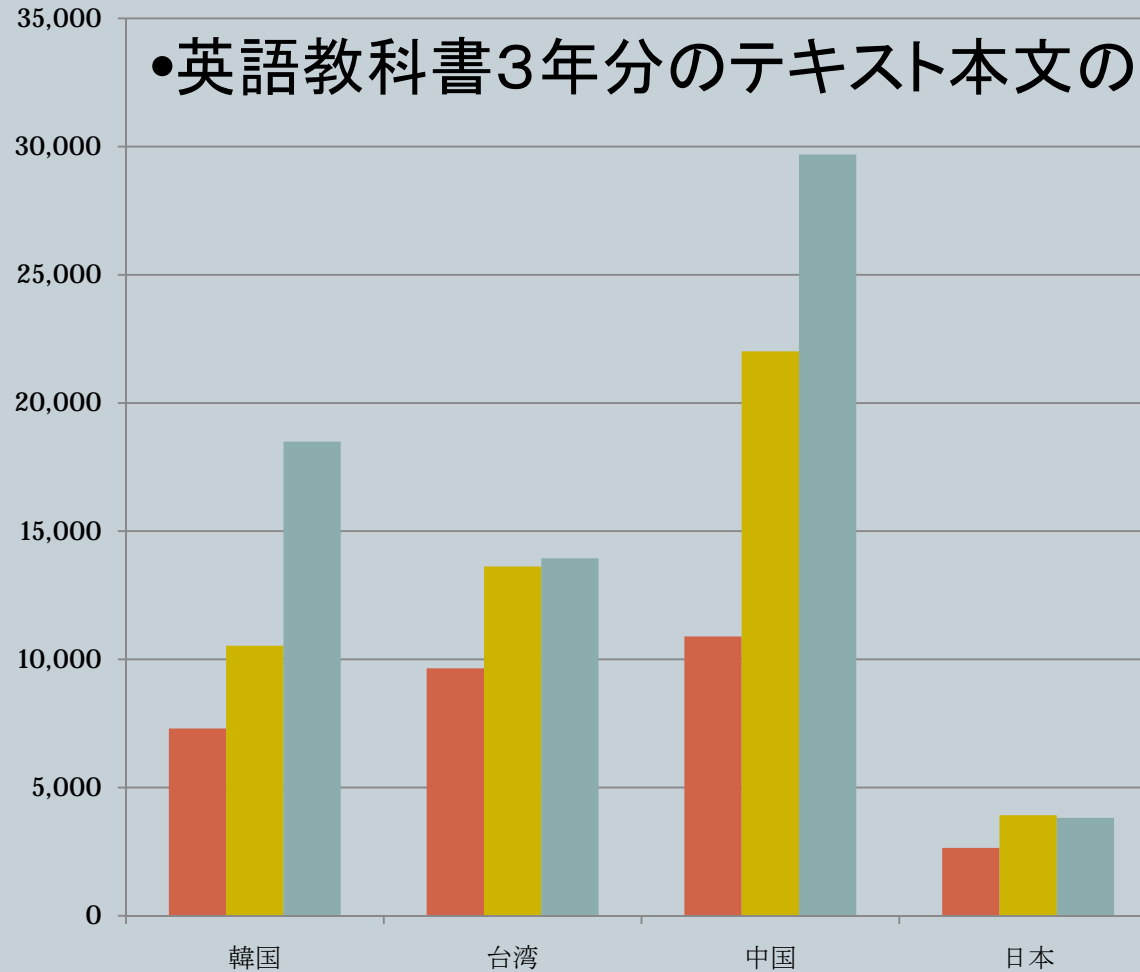
韓国・台湾は  
日本の約2倍  
の語彙量

中国は日本の  
約2~3倍の  
語彙に触れている

# ポイント1: 中学で接する英語の分量(2)



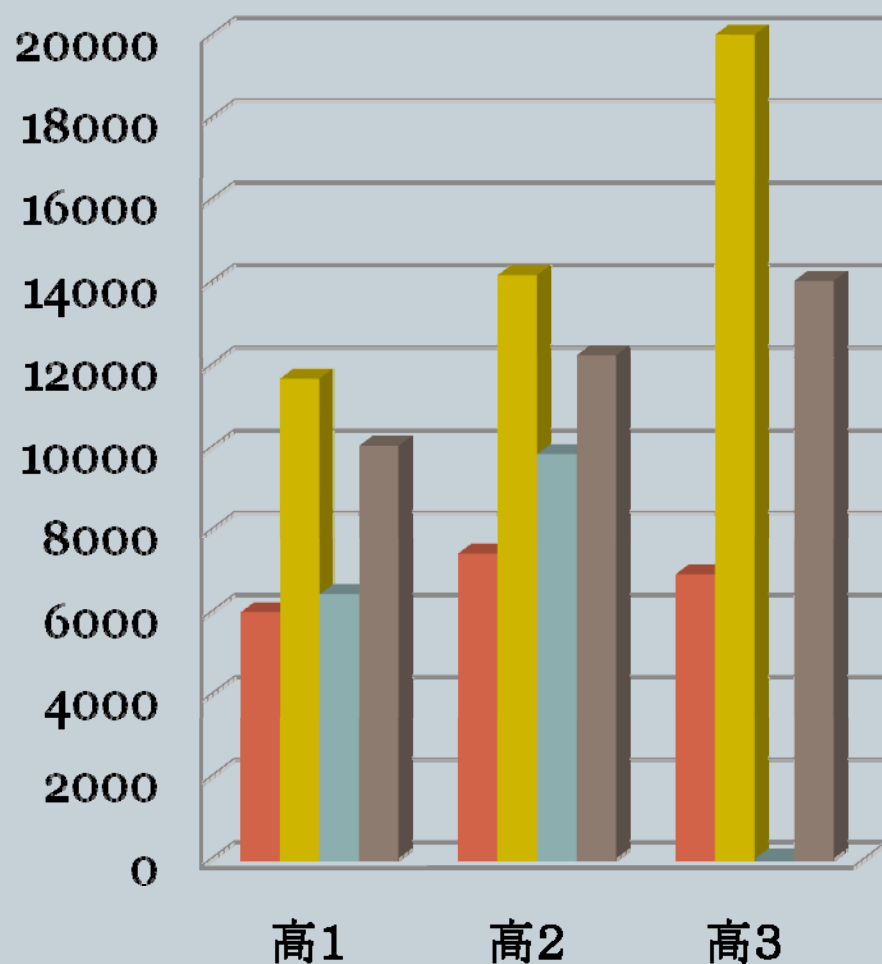
## ●英語教科書3年分のテキスト本文の分量比較



韓国・台湾の本文は  
日本の  
2.5~4.5倍

中国は日本の  
4~6倍  
のテキスト量になる

## ポイント2: 中学から高校への積み上げ部分



- テキスト分量は高校に入ると日本もかなり増える
- それでも、韓国・台湾の約1/2~1/3
- 中国は実際はワークブックを除外しているため、この倍近くの量が教科書に入っている。

# ポイント3: 接している英語の質的問題



日本の英語教科書 = 過去形の出現状況: 1年後半から徐々に現れる





# ポイント3: 接している英語の質的問題(3)



## 高校教科書語彙分析

1億語BNC ランキング	合致した 単語群	韓国	日本	中国	台湾
1000	972	89.81%	77.98%	84.16%	96.71%
2000	863	63.73%	45.54%	52.72%	87.02%
3000	656	43.14%	24.70%	32.01%	76.98%
4000	454	37.67%	16.96%	23.57%	68.94%
5000	342	35.96%	19.30%	14.91%	69.30%
6000	250	30.40%	14.40%	18.40%	66.80%
7000	150	33.33%	8.00%	16.00%	63.33%
8000	129	28.68%	10.08%	9.30%	69.77%
9000	93	30.11%	10.75%	10.75%	70.97%
10000	70	27.14%	12.86%	15.71%	62.86%

# ポイント3: 接している英語の質的問題(3)



## 高校教科書語彙分析

1億語BNC ランキング	合致した 単語群	韓国	日本	中国	台湾
1000	972	89.81%	77.98%	84.16%	96.71%
2000	862	62.72%	45.54%	52.72%	87.02%
3000	752	42.82%	24.70%	32.01%	76.98%
4000	642	22.92%	16.96%	23.57%	68.94%
5000	532	13.02%	19.30%	14.91%	69.30%
6000	422	3.12%	14.40%	18.40%	66.80%
7000	312	1.22%	8.00%	16.00%	63.33%
8000	202	0.32%	10.08%	9.30%	69.77%
9000	93	30.11%	10.75%	10.75%	70.97%
10000	70	27.14%	12.86%	15.71%	62.86%

他国の教科書に比べて、基本語グループの割合が低い。これは日本の高校教科書が少量のテキストで難易度の高い語彙を無理して出しているから。

# 中・韓・台の小中高英語教科書合成語彙リスト



高3					3496語
高1～2					2894語
中2～3					1565語
中1					282語
小学校					987語

中国・台湾・韓国の小・中・高の教科書を串刺しにして、各レベルで共通に出現する英単語でそのレベル以降にすべて現れるものを段階的に抽出した。  
小学校の1000語を中1段階で繰り返し習熟させるような教科書作りであることがよくわかる。

## まとめ



1. 日本の英語教科書は中学3年間の内容でほぼ1000語を教えており、アジア諸国(中・韓・台)の小学校終了時のレベルに相当する。
2. さらにアジア諸国の中学英語は、日本の語彙量の2~3倍、接触するテキスト量は3~5倍に上る。
3. 日本は高校教科書で背伸びをしており、語彙量を増加している割には少ないテキスト量でそれを達成しようとしており、無理がある作りになっている。
4. 取り上げられている英文のテキスト・タイプもしっかりした書き言葉を教えるのが高校まで持ち越されており、高校での負担過重な様子が教材的にも見て取れる。

## まとめ2



- アジア諸国の教科書は、小学校で各国共通約1000語を指導、それが中学校1年レベルであまり語彙を増強せず、習熟させてから、2～3年でもう1500語を上乗せしている。
- 教科書作りの特徴としては、中国は中・高と語彙レベルのコントロールがきつめで、比較的語彙制御されたテキストを大量に触れさせる傾向が強い。一方、台湾は高校以後は語彙制御をしない大量の英文に触れさせる傾向がある。韓国はその中間。
- 各国とも小学校での英語教育の教授内容に裏打ちされた教科書作りが一定基準でなされているといえよう。
- 日本の教科書作りの問題点の早急な改善が望まれる。